公開講演会（平成17年５月21日開催）

「上咋麻呂の悔」

「正倉院文書」に、「上咋麻呂（かみのくいまろ）」なる人物の書いた、非常に興味深い２通の手紙があります。１通は、官職につけるよう力添えをしてほしい、もう１通は鰯を贈るので受け取ってほしい、というものです。

現在、咋麻呂の２通の手紙は別の巻物に収まっていますが、近年の研究で、もとは一巻の巻物に張り継がれていたことが明らかにされています。

正倉院文書の多くは、造東大寺司写経所という役所の帳簿類で、様々な文書を反故紙として再利用しています。咋麻呂の２通の手紙も反故として帳簿に利用されたことが判明しています。

以上から次のことがわかります。宝亀３年（772）10月23日の晩から翌日に人事があるという情報を得た咋麻呂が、親類のコネを頼りに上馬養（かみのうまかい）（写経所でそれなりの地位にあります）に１通目の手紙を出します。しかし人事はなく、咋麻呂は28日には鰯を贈りますが、馬養には「不用」と突っ返されてしまいます。噂に右往左往しつつ、必死に官職を求める咋麻呂を哀れむのか、共感するのか、さて・・・。

（平城宮跡発掘調査部　馬場 基）